【活動レポート】6/17「緑のサヘル」活動紹介・インターン募集説明会に参加して

今年度 VOLAS では、国際協力の話を聞く機会を増やしていきたいと思っています。実際に現場で活躍されている方や現場に出る人のための調整業務をされている方の話の中に、次のステップのためのヒントがあると思います。そこから何を学ぶかは、学生の皆さん自身にかかっています。

6 月 17 日に、 国際協力 NGO「緑のサヘル」の事務局長をされている菅川さんをお迎えしてお話を伺いました。"インターン募集説明会"としていたため、参加した学生は 7 名でしたが、40 分に及ぶ菅川さんの話は、緑のサヘルの活動紹介となるものでした。さらに 3 限になってからも 1 時間ほどお話を伺いましたが、青年海外協力隊として昭和 63 年からモロッコに赴任し、帰国してからもアフリカにかかわり続ける、菅川さんの熱い思いが伝わる場となりました。

タイトルを見て「自分には関係ない」と切り捨てるのではなく、何かのきっかけになるかもとアンテナを伸ばし続けていって、こういった機会を生かしてほしいと思います。今年は 12 月頃にまた菅川さんにお越しいただき、お話を伺う時間を作りたいと思います。

お楽しみに。（VOLAS コーディネーター　西原）

以下、学生の活動レポートです。

緑のサヘルはアフリカの中でも一番厳しい状況にある、ブルキナファソとチャドをフィールドに活動している NGO です。昼休みの時間は緑のサヘルがどのような活動をしているのかについてお話ししていただきました。

私は今まで、砂漠化は地球環境の問題の一つという認識で、そんなにも生活に密接に関わっている問題だと思っていませんでした。そのため正直他人事として、一つの問題として、砂漠化が進んでいる、だから木を植えよう、という考えは確かに理解していましたが、現地の人がどのようにそれを理解して活動しているのかイメージが湧きませんでした。

お話しいただいた中に、数十年前までは森林が広がっていた地域が砂漠となってしまった村の話がありました。

そこでは生活で薪を使うために木を切っていたら最後の一本まで切って森がなくなってしまったそうです。しかし緑が無くなると、雨が地面の養分を全て流してしまい、その土地では作物が育たなくなります。また突風が吹き砂嵐が起こると砂やゴミが、水や体内に入り病気を起こす、といったように、緑がなくなることが生活全体に影響していました。

食べ物や水など最低限の生活に必要なことが満たされない状況では植林活動は根付かないため、まずは、作物を作ることができる環境を整えるなど生活環境を改善することから始め、徐々に植林活動もスタートさせていったそうです。この植林活動は現地の環境意識の改善に繋がることも意図し、実際に、こんなにも木を育てるのが大変だったのか、という気づきから自分たちで緑の保護区も作るといった活動も起こり、今では大きな森林地帯となっているそうです。

今までいくつかの NGO の活動説明を聞いたことがありましたが、今回の菅川さんの話は、実際行っている活動と、どうしてその活動を行っているのかということが、今まで聞いた話の中で一番リンクして理解できました。そして活動がこちらからの善意の押し付けではなく、現地のニーズとして必要で、現地の人も活動の意図や必要性を理解している上で、さらに現地の状況に合わせて進めていくことで成果をあげることも改めて学びました。

（国際社会学部朝鮮語 3 年　佐藤真希）

日時: 2016 年 06 月 21 日